

2022 年度伝道研究会（5月18日）

「出張所創立 50 周年記念祭を終えて、反省と次のステップ」

清水 直太郎

今年 2022 年 3 月 20 日、コロンビア出張所創立 50 周年が執り行われた。今回の発表は創立 50 周年を終え、遡ること 11 年前の創立 40 周年への取り組みや、それ以降、10 年間の方向性に基づく道の歩みと反省を主に発表した。特に、現地コロンビア人の講師の人材育成をどのようにしたか、力を入れた活動と方法を述べ、その経緯と問題についても言及した。

また、1972 年 3 月 8 日に天理教コロンビア出張所が開設されてから 50 年の今日までの大まかな流れと出張所の機能の分岐点についても言及、設立当初の出張所の目的と神殿落成からの出張所の役割について概略的な分析を行った。

さらに、コロナウイルスによるコロンビア社会におけるロックダウンが及ぼした、50 周年記念祭に向けての活動への影響と、ラテンアメリカ社会の習慣を踏まえて、これからの天理教の海外布教における展望を述べ、海外拠点において必要な行事・活動を示唆した。

第 348 回研究報告会（5月26日）

「心の資本を育てるといふこと

天理大学での PBL（問題解決学習型授業）10 年のふりかえり」

谷口 直子

「資本」とは企業活動の原資であり、企業は資本を増加させることによって成長していく。人も同様で、「心の資本」を原資にして成長していくのではないかと思う。この視点で、これまで学生と行ってきた PBL（プロジェクトを行うことで問題解決を学ぶ形式の授業）の意味を考えてみた。

人が生涯学び続けて成長することを支援する「生涯教育」を学ぶ学生たちは、問題を発見して解決に導き、達成感を味わうことで心の資本を増やすのではないか。そのためには学外の他機関と協働した PBL が有効な学習手段であるように感じて実践してきた。

大学での PBL のみで簡単に心の資本の増強ができるものではない。また、すべてが成功例とは言えない。しかし、生涯にわたる学びは継続していくのだから、学生が卒業後の人生で当時の失敗を思い出して、それを資本とすればよいことだ。まずは、挑戦が大事なのだ。

PBL は時間と手間がかかる。しかし、卒業生と苦勞した思い出を語るときに、学生時代に心の資本を充実させることが将来の成長につながるのだと、しみじみと感じている。

天理参考館で記念講演（5月27日）

澤井 真

天理大学附属天理参考館を会場に、4 月 15 日から 6 月 6 日まで開催されていた第 89 回企画展「エジプト・カイロの大衆文化—1959 年のタイムカプセル—」において、「タイムカプセ

ルから紐解くエジプトの暮らし—イスラームとの関わりから—」と題した記念講演を行った。それに先立つ 4 月 22 日には、梅谷昭範学芸員が、第 293 回トークサンコーカンで「タイムカプセルが伝えるもの—1959 年のエジプト・カイロ—」と題して、企画展の趣旨と見どころを解説した。

講演の冒頭では、1959 年にエジプト・カイロで収集された資料群がなぜ天理参考館に収蔵されているのかを、中山正善 2 代真柱と田中四郎氏（京都外国語大学名誉教授）の交流をめぐるエピソードを取り上げた。そのうえで、展示品のいくつかを、イスラームの教えやアラブ文化との関わりから解説した。おわりにあたっては、今となっては入手することが極めて困難な膨大な資料が、「タイムカプセル」のように天理参考館に保存することができたのは、大きなスケールで世界を眼差していた 2 人の出会いがあったからだと締めくくった。

第 63 回印度学宗教学会学術大会で発表

堀内 みどり

5 月 28 日及び 29 日に標記大会がオンラインで開催された。28 日午前及び 29 日には個人研究発表が行われ、堀内は、28 日午後に開催された課題研究「受難と再生」（4 名によるパネル発表、司会は東北大学の谷山洋三氏）において、「社会の中の天理教の教会：新たな展開への試み」と題して発表した。発表では、まず、地方都市における宗教施設の維持と活動の変容についての研究を紹介、宗教施設が持つ社会関係の維持や地域コミュニティの拠点としての機能に注目し、現代日本が抱える問題解決に向けた天理教の地方教会の試みについて検討した。

なお、天理大学関係の発表は以下の通り。

澤井治郎「教派神道と教典」

澤井真「イスラームにおける聖者論の展開」

澤井義次「ウィルフレッド・C・スミスの宗教理解とその特徴」

日本イスラム協会で講演（6月12日）

澤井 真

「イスラーム理解講座：スーフィズムとは」と題した公開講演会が日本イスラム協会で開催され、「生き方としてのスーフィズム—人間についての探究—」というタイトルで講演を行った。日本イスラム協会は、1963 年にイスラーム諸国との文化交流を目的に設立された学会で、東京大学イスラム学研究室に事務局が置かれており、年 2 回公開講演会を開催している。コロナ禍の影響から、今回の講演会はオンラインでの開催となった。

講演では、「イスラーム神秘主義」とも表現されるスーフィズムが、イスラームにおいていかなる位置を占めるのかを、歴史的な経緯ばかりではなく、イスラームの神秘家であるスーフィーらのテキストを紹介しながら解説した。

スーフィズムは、歴史的に多くの民衆に支持された一方で、宗教的・政治的に危険視されたこともある。しかしながら、現代世界では、イスラームを知らない欧米のキリスト教徒との懸け橋となるなど、重要な役割も果たしてきた。こうした点を踏